

ようこそ

養育院・渋沢記念コーナーへ



センター史展示



ココロと
カラダの学び



憩いの空間

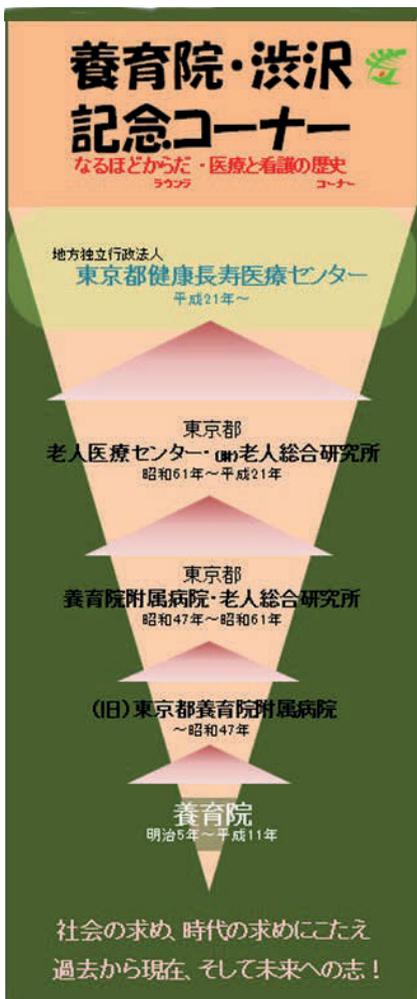


地方独立行政法人

東京都健康長寿医療センター

養育院・渋沢記念コーナー

東京都健康長寿医療センターの淵源は明治5年(1872)に設立された『養育院』に遡ります。その維持・発展には、経済人渋沢栄一の半世紀を超える尽力があります。これを記念して『養育院・渋沢記念コーナー』が作られました。



養育院開設から今につながる、
施設の変遷をあらわした表示

養育院・渋沢記念コーナーは、医療センターの2階に開設しています。売店やレストランと隣接した明るいホールです。このコーナーには、3つの役割があります。

- ①養育院の歴史を紹介する展示
- ②健康問題への対処を学ぶ自己学習の場
(なるほど！からだラウンジ)
- ③癒し・憩いのスペース(飲食OK)



養育院施設の歴史を語る実物展示



● 歴史解説パネル
● 櫻園通信

コーナー設置のリーフレット「櫻園通信」。各号で展示物の説明や超現代語訳を紹介しています。

センターのホームページの歴史コーナーでも見られます。

<https://www.tmg Hig.jp/hospital/about/history/index.html?id=kankou>

開放感のある明るい円形ホール



学びと憩い



実物展示

養育院100周年記念式典
皇太子（現上皇）ご夫妻行啓

渋沢栄一揮毫の軸

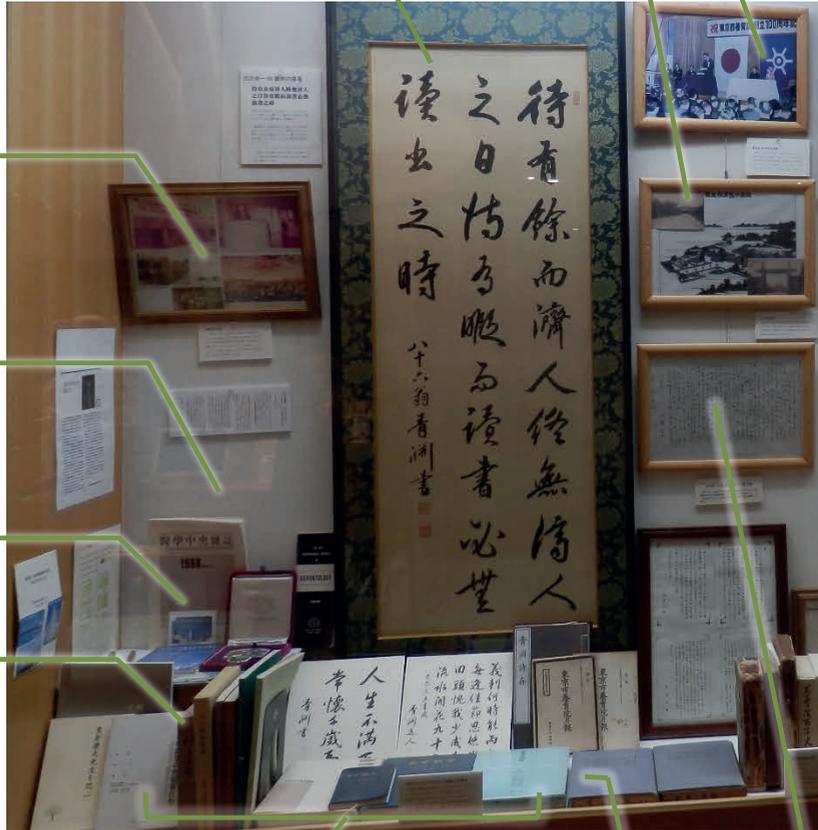
養育院大塚本院絵図

第11回国際老年
学会1978年東京
村上元孝会長

医学中央雑誌
関連資料

国際老年学会
記念文鎮
ブローチ
プログラム

当院関係者
開催学会資料



歴代病院長の編著作・養育院の刊行物



養育院初代院長
渋沢栄一（写真）

松平定信の「心願書」と渋沢栄一の「讃」

大久保一翁（油彩）
幕末に蛮書調所総裁時に西洋式小石川養生所を提案、
明治になって東京府知事のととき、養育院を作る

松平定信（自画像）
七分積金・町会所

昭和天皇ご夫妻行幸

看護学校卒業式
渋沢栄一も参列

蕃書調所総裁大久保忠寛
の病幼児創立意見

渋沢栄一から
大久保一翁への手紙

東京府病院・養育院明
治9年東京府決算書



新1万円札（2024年）
の肖像に渋沢栄一が決定。

渋沢栄一の養育
院公営化建議書

養育院60,70,80,100,120年史
養育院月報・渋沢栄一関連書籍

日本最古の老年医学教科書
老人病学（大正元年）
：入澤達吉等著



論語と算盤
：渋沢栄一著

屋外へ

養育院中央記念広場

徳川家光墓前石灯籠
(寛永寺より移設)

文化財解説板



渋沢栄一
1925
板橋区

養育院本院の碑（碑文）

養育院は、明治五（千八百七十二）年十月十五日に創設された。維新後急増した窮民を收容保護するため、東京府知事大久保一翁（忠寛）の諮問に対する営繕会議所の答申「救貧三策」の一策として設置されたものである。この背景には口シア皇子の訪日もあった。事業開始の地は本郷加賀藩邸跡（現東京大学）の空長屋であった。その後、養育院本院は上野（現東京芸大）、神田、本所、大塚と市内を転々としたが、関東大震災後、現在地の板橋に移転した。養育院設置の原資は営繕会議所の共有金（江戸幕府の松平定信により創設された七分積金が明治新政府に引き継がれたもの）である。養育院の歴史は渋沢栄一を抜きには語れない。営繕会議所は、共有金を管理し養育院事業を含む各種の事業を行なったが、渋沢は明治七年から会議所の事業及び共有金の管理に携わり、養育院事業に関わるようになった。明治十二年には初代養育院長となり、その後亡くなるまで、五十有余年にわたる養育院長として事業の発展に力を尽くした。

養育院は、鰥寡孤独の者の收容保護から始め、日本の社会福祉・医療事業に大きな足跡を残した。特に第二次大戦後は、児童の保護や身寄りのない高齢者の養護、さらに高齢者の福祉・医療・研究、看護師の養成など時代の要請に応じて様々な事業を展開した。

平成十一年十二月、東京都議会において、養育院廃止条例が可決され、百二十七年にわたる歴史の幕を閉じたが、養育院が行ってきた事業は形を変えて現在も引き継がれている。養育院に関連する碑は、ほかに東京都台東区谷中の大雄寺、了侘寺（リョウウゴンジ）、栃木県那須塩原市の妙雲寺及び東京都府中市の東京都多磨霊園にある。

なお、碑の「養育院本院」は渋沢栄一の墨蹟を刻んだものである。

平成二十五（二千十三）年三月

養育院を語り継ぐ会

この碑は元養育院職員などの篤志によって建てられました。

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター

今に残る「養育院」

①街路樹のプレートに「養育院通り」の文字

銅像
(大正14)年建立
登録有形文化財



徳川家斉墓前石灯籠
(寛永寺より移設)

養育院本院の碑



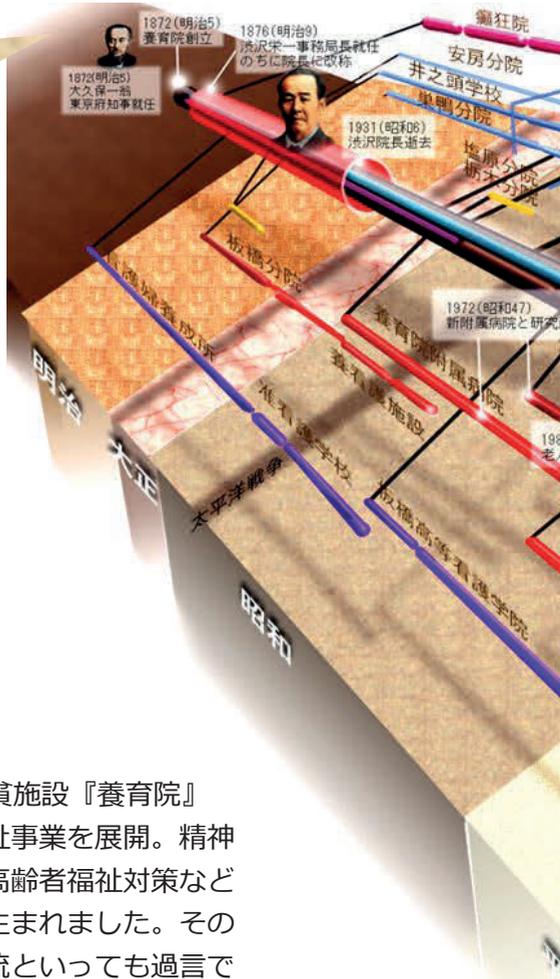
ヒポクラテスの木

(センター正門脇)

西洋医学の父ヒポクラテスは、ギリシャ・コス島のプラタナスの木の下で弟子に医学を教えたといわれます。ゆかりの木はヒポクラテスの木と言われてコス島に現存しています。この伝説の木の子孫株です。

養育院から 東京都健康長寿医療センターへ

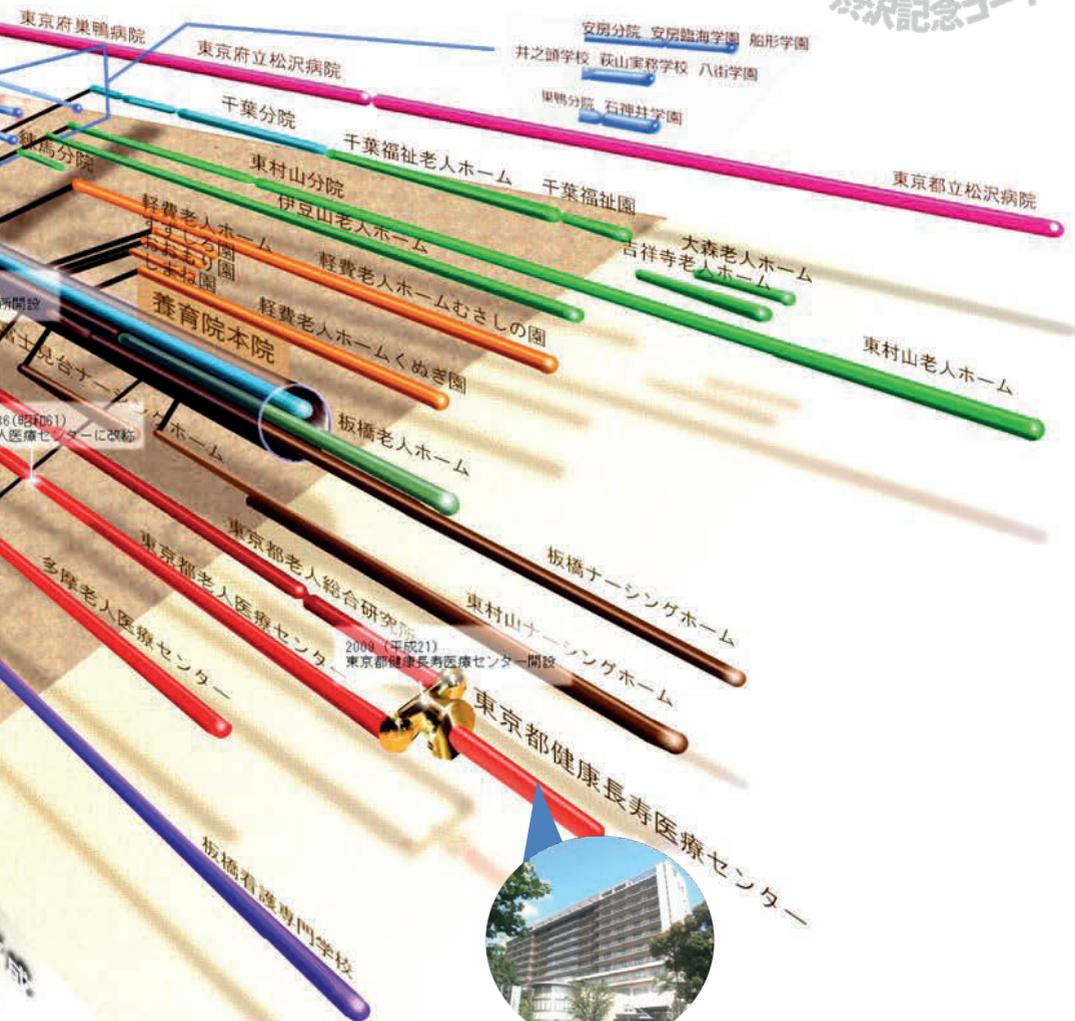
人の万物に勝れたるは
相親しみ相助くるの
心あるゆえなれば
常に我が身に費やす衣食位の
世の恵みにむくわんと心がけ
何業なりとも
世のためとなるべきこと
勤めて怠るまじき事



養育院掟書初款…明治6年、養育院を恒久施設として上野に開所した時、大久保一翁府知事が視察後に書き加える。

1872（明治5）年に設立された救貧施設『養育院』は、時代の求めに応じて、医療・福祉事業を展開。精神病・ハンセン病・結核・児童福祉・高齢者福祉対策などのさまざまな専門施設が養育院から生まれました。その歴史は、日本の近代医療・福祉の源流といっても過言ではありません。

『養育院』という名称の組織は、2000（平成12）年の都条例廃止まで存続しました。



江戸の医療と福祉

- 小石川養生所設置 1722（享保7）年
幕府は無料で庶民の病気治療にあたる養生所を設置。
幕末までの約140年間、貧民救済施設として機能。
- 寛政の改革 1787-93（天明7-寛政5）年
松平定信は、江戸の地主負担の町入用を積立させ、
困窮者の救済に役立てた。（七分積金・町会所）
- 蕃書調所改編 1856年（安政3年）
黒船来航後、老中阿部正弘は蕃書調所を改編。西洋
知識・技術の導入をはかる。
- 病幼院創立意見 1857（安政4）年
大久保忠寛（蕃書調所総裁）、西洋版小石川養生所
「病幼院」の建設を提案。
- 海軍伝習所・長崎養生所 1857（安政4）年
オランダ海軍医ポンペは、幕府による医学伝習所・
長崎養生所を設立し、西洋医学教育を行う。
- 種痘所・西洋医学所 1858（安政5）年
伊東玄朴らは「お玉が池種痘所」を設立。のちに
「官立種痘所」、「西洋医学所」に発展した。
- 欧米への使節団派遣
幕府は遣米使節団、遣欧使節団、パ
リ万博使節団（渋沢栄一参加）、留
学生などを欧米に派遣して工場、軍
事、病院などを視察、情報蓄積に努
めた。



松平定信



大久保忠寛
= のちに養育院を創
った東京府知事大
久保一翁

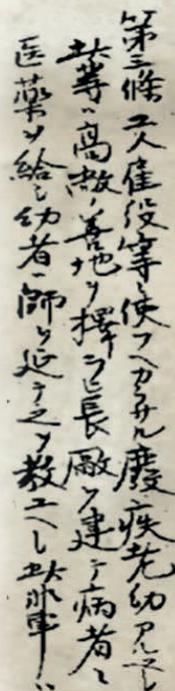
長崎養生所



養育院と東京府病院

福祉施設と近代的病院

- 1868（慶応4）年。江戸開城。大久保一翁（若年寄）は七分積金を含む幕府財産の移管に立ち会う。
- 1867-1868（慶応3-明治元）年。明治維新。幕府崩壊による市中経済の破綻により、新首都東京は大量の貧民があふれる事態に。七分積金による教育所（三田、高輪、四谷）で対応。
- 1868（明治元）年。大久保一翁は駿府徳川藩立ち上げに尽力。
- 1872（明治5）年。町会所・七分積金は営繕会議所・共有金に改名。廃藩置県で大久保一翁上京、東京府知事に任命。大久保一翁府知事、営繕会議所に対して貧民の対応策を諮問。営繕会議所は答申で「救貧三策」を提示。
…職業斡旋、病者の医療、児童教育等の施策案
→ ロシア大公来日。市内の貧民を加賀藩敷地内の長屋（文京区本郷）に仮収容。翌年上野に恒久的な保護・医療施設**養育院**を開設。
- 1873（明治6）年。**東京府病院**の開設公布。翌年開院。高給お雇い医師（米・英・蘭）、幕府の奥医らが活躍。
→ 養育院の医療は東京府病院の管轄に。
明治13年、救貧医療に限定。明治14年廃院。
→ 有志共立東京病院（高木兼寛、松山棟庵ら）に払い下げ。
→ のちに渋沢栄一は慈恵会を設立して財政支援し、慈恵会医科大学となる。



第三條 又佳役等使フハカクん廢疾老幼を以て
此等ハ高敷善地ヲ擇ラシ長廠ヲ建テ病者ハ
医藥ヲ給シ幼者ハ師ヲ延テ之ヲ教エシ此亦事ハ

救貧三策第3条



東京府病院

大久保一翁（忠寛）と 渋沢栄一

● 養育院をつくった知事 大久保一翁（忠寛）

- ・ 1857（安政4）年、蚕書調所総裁の時、「病幼児院創立意見」を提出したが、実現せず。
- ・ 江戸城無血開城時は幕府の実務責任者だった。救民基金「七分積金」を、江戸幕府から明治新政府に引き継ぐ。
- ・ 江戸開城後、駿府藩中老に就任。渋沢栄一のパリ派遣団帰国報告（徳川慶喜）に立ち会う。
- ・ 1869（明治2）年、静岡藩の太政官札の運用を渋沢栄一に託し、商法会所を設立。
- ・ 1872（明治5）年、廃藩置県後に上京。東京府知事に就任。養育院・東京府病院を設立。



● 日本資本主義の父 渋沢栄一

- ・ 若い頃、尊皇攘夷運動に傾倒するも、縁あって一橋家に仕官して武士になり、慶喜が徳川將軍になると幕臣に。
- ・ 江戸幕府のパリ万博派遣団に庶務・会計係として参加。ヨーロッパ資本主義、銀行制度、株式制度を学ぶ。
- ・ 明治政府で経済運営の要を占めたが、大久保利通の予算要求に抵抗し、1873（明治6）年退官。東京府知事大久保一翁より七分積金の運用を託される。
- ・ 現在の「みずほ銀行」、「王子製紙」、「東京ガス」、「第一三共」などの約500社に関与し、日本資本主義の父と言われている。
- ・ 2024年から新1万円札の肖像になる予定。



養育院、冬の時代：苦しい委任経営 渋沢栄一の奮闘と公営復帰

● 東京市議会での養育院廃止論と渋沢栄一の反論

東京市会議員田口卯吉が「税金を使って、貧乏で働けない人を養育することは怠け者を作ることになり、税金で養うべきではない」と演説。渋沢栄一は、政治は論語でいう仁に基いて行なうのは当然と主張した。しかし、税からの運営費支出が止められ、養育院は委任経営となった。

● 公営廃止後、養育院経営を受託した渋沢栄一

養育院委員会（伊達宗成、橋本綱常、松平教敬らを編成）

養育院は本所に移転、土地の売却、利子、鹿鳴館の慈善バザー、寄付、皇室の援助などで運営するも、資金不足で縮小。

養育院運営資金を
確保するための
慈善バザー



● 渋沢栄一の 養育院公営化を求める建議書

養育院は、1890（明治23）年、東京市営となり、渋沢栄一は養育院長に就任。渋沢栄一は、ヨーロッパには大きな慈善施設があると主張し、大塚に新施設の建設を求めた。



養育院に関する渋沢栄一の建議書

渋沢養育院長のもとで 福祉事業拡大に貢献した人々

東京市養育院全圖



養育院は明治22年、東京市市営となり、渋沢は市委託の養育院長となる。そのもとで、大塚に新施設建設、安達憲忠、入澤達吉、光田健輔、田中太郎らが活躍。

● 安達憲忠

1888（明治21）年、東京府に就職。渋沢栄一に見込まれて1891（明治24）年に養育院幹事となる。

渋沢を補佐して社会事業に邁進。実質的な企画運営を担い、回春病室、井之頭学校、安房分院、巢鴨分院、板橋分院の創設などに尽力。

安達が企画し、渋沢が政治的な仕組み作りと資金集めを行い、安達が運営の実務をこなすと言う二人三脚であった。

● 入澤達吉

東大でベルツに学び、1895（明治28）年東大助教授。助教授時代に養育院医長を兼任、安房分院、板橋分院などで、結核対策に尽力。養育院体験を元に「老人病学」出版、老人病学の草分けとなる。ベルツの後任教授となり、内科学の確立に貢献。

● 光田健輔

東京帝大病理から、東京市養育院に派遣。ハンセン病に関心をもち、専用の回春病室を設営した。病理・臨床教育、看護教育、安房分院、結核対策などで活躍。1908（明治41）年養育院副医長に就任。その後、多摩全生病院、長島愛生園園長。昭和26年文化勲章。



養育院での看護活動

● 拝志よしね

養育院幹事・安達憲忠の妻。日本人として初めてヨーロッパの看護学を修めた。新婚早々、看護学留学生としてロンドンへ。帰国後、東京慈恵医院で勤務したが、結核に斃れる。安達との結婚生活は5年、このうち3年はロンドン、しかも極めて多忙な日々であった。

● 瓜生岩子

養育院の孤児の不活発な様子に心を痛めていた渋沢は、安達憲忠の旧知の慈善家・瓜生岩子を、幼童世話掛長として会津から招いた。瓜生は維新の会津戦争下で、両軍の傷兵や窮民の看護、孤児の教育に実績をあげ、その後も恵まれない子供の養育に携わった人である。日本のナイチンゲールと言われ、浅草の浅草寺境内に銅像がある。

● 養育院での看護教育

1873（明治6）年：養育院掟書に看護人規則

1896（明治29）年：養育院で看護講習開講

1899（明治32）年：東京市養育院看護婦養成所認可

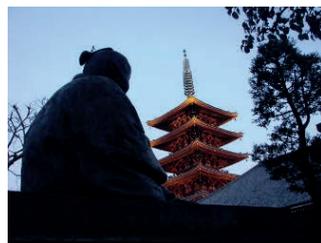
1951（昭和26）年：東京都養育院附属看護学院

1971（昭和46）年：東京都板橋高等看護学院

1977（昭和52）年：東京都板橋看護専門学校に改称



聖トマス病院にナイチンゲールが作った看護学校
拝志よしねはここに学ぶ。



浅草寺の瓜生岩子銅像



渋沢栄一は、大正9年より12年間、毎年卒業式に出席し、卒業証書を授与している。写真は昭和初期の写真で、中央に渋沢が写っている。

第2次世界大戦と戦後の復興

● 養育院疎開の悲劇

1944（昭和19）年、塩原温泉の旅館を買収し、栃木分院を開設、養育院入所者を疎開させた。1945（昭和20）年には養育院収容者1,211人のうち、694人が在籍した。戦中、戦後の劣悪な食糧事情の中で、1952（昭和27）年まで、この地における物故者は582名にのぼり、那須塩原の妙雲寺に合葬されている。



妙雲寺の養育院合葬墓

● 板橋本院の空襲

1945（昭和20）年4月、米軍の東京大空襲で板橋施設の9割が焼失、看護婦等の奮闘にもかかわらず、利用者107名の犠牲を出した。



板橋本院敷地内で不発弾処理

● 戦後の復興

戦災孤児収容と板橋本院再建

戦後の混乱期、養育院には戦災浮浪児が収容された。1949（昭和24）年には、昭和天皇御夫妻がお見舞いに行幸された。

日本が高度成長の波にのると、社会の求めも変質し、救貧対策から、障害者・高齢者福祉の充実へと移行し、施設が徐々に作られるようになった。



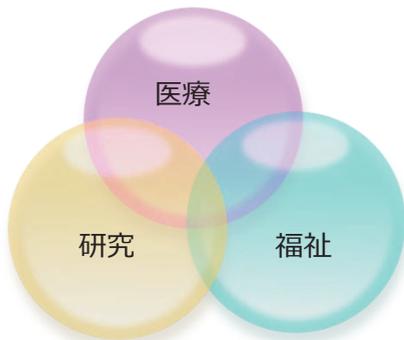
昭和天皇皇后両陛下が養育院へ行幸

板橋キャンパス1972-2009

高齢社会の到来にむけた三位一体の事業展開

● 医療・・・養育院附属病院から

東京都老人医療センターへ
最新の医療設備（CT、MRI、PET）
高齢者リハビリテーションの展開
高齢者診療のガイドライン作成
先端医療・地域連携
→高齢者に最適の治療を追究



● 研究・・・東京都老人総合研究所の開設

老化・老年病の自然科学的研究
高齢者と社会の人間科学、社会科学的研究
市民公開講座（1972～継続中）
海外との研究交流



付属病院開院時
皇太子（上皇陛下）ご夫妻行啓

● 福祉・・・老人福祉施設の開設

- 養護老人ホーム
- 特別養護老人ホーム



板橋ナーシングホーム
ハーフウェイハウス
指定介護老人福祉施設
介護老人保健施設
ショートステイ
通所リハビリテーション



板橋キャンパス模型（1975年）

地方独立行政法人 東京都健康長寿医療センターの出発

- 東京都老人医療センターと東京都老人総合研究所を経営統合
2009（平成21）年、2施設を合併し、地方独立行政法人東京都健康長寿医療センターとして発足。

- 新施設の建設
2013（平成25）年、新病院・研究所に移転。

- 東京都健康長寿医療センターのめざすもの

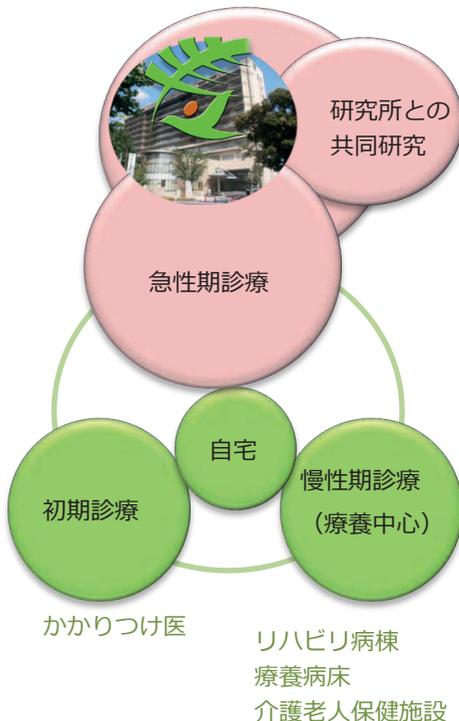


■ 基本理念

センターは、高齢者の心身の特性に応じた適切な医療の提供、臨床と研究の連携、高齢者のQOLを維持・向上させるための研究を通じて、高齢者の健康増進、健康長寿の実現を目指し、大都市東京における超高齢社会の都市モデルの創造の一翼を担います。

■ 病院運営方針

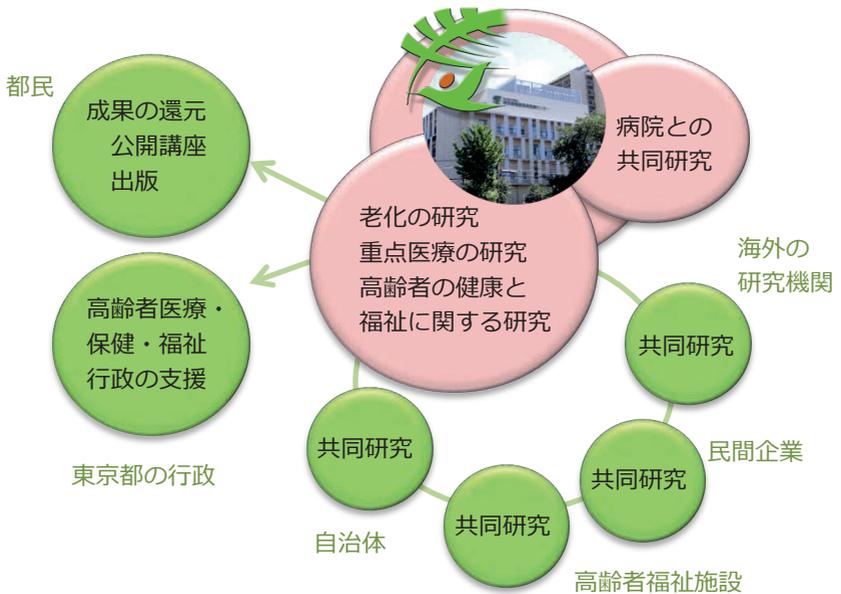
- ・ 患者さま本位の質の高い医療サービスを提供します。
- ・ 高齢者に対する専門的医療と生活の質（QOL）を重視した全人的包括的医療を提供します。



- ・地域の医療機関や福祉施設との連携による継続性のある一貫した医療を提供します。
- ・診療科や部門・職種の枠にとらわれないチーム医療を実践します。
- ・高齢者医療を担う人材の育成及び研究所との連携による研究を推進します。

■ 研究所運営方針

高齢者の健康維持や老化・老年病の予防・診断法の開発等の研究を支える観点から老化のメカニズムや老化制御などの基盤的な研究を実施するとともに、高齢者の健康長寿と福祉に関して、疾病予防や介護予防等の視点から、疫学調査や社会調査などによる社会科学的な研究を実施します。



- ・東京都の高齢者医療・保健・福祉行政を研究分野で支えています。
- ・地域の自治体や高齢者福祉施設と連携して研究を進めています。
- ・国や地方公共団体、民間企業等と活発に共同研究を行います。
- ・諸外国の代表的な老化研究機関と積極的に研究交流を行います。
- ・最先端技術を用いて老年病などの研究を行います。
- ・研究成果を公開講座や出版によりみなさまに還元しています。

時代の求め、社会の求めに応える志

養育院を支えた
多くのひとたちの志

船形磨崖碑（千葉県）

多くの人たちの基金が
養育院建設に充てられ、
このことを顕彰する10m
を超える巨大な磨崖碑が
大正3年に房総の船形に
作られた。



村上元孝・太田邦夫：

1972～の病院、研究所の活発な運営



渋沢栄一：

半世紀にわたって養育院の維持・発展に尽力

・安達憲忠・拝志よしね：

社会時事業に執念

・入澤達吉：

養育院医長、老人病学

・光田健輔：

ハンセン病、看護・医師教育



大久保一翁：

病幼院創立意見、
養育院・東京府病院創立



松平定信（白河楽翁）：

七分積金、町会所

養育院・渋沢記念コーナー 利用案内

- 養育院・渋沢記念コーナーは、老年学情報センター（職員用図書館）と連携し、多くのボランティアのみなさまのご協力により運営されています。

養育院・渋沢記念コーナー
施設沿革の紹介
患者様とご家族の自己学習
くつろぎの場

老年学情報センター
（職員専用図書館）
歴史資料の整理と保存
患者様とご家族の自己学習支援

屋外の史跡
渋沢栄一銅像
養育院本院の碑
徳川家墓前石灯笼



歴史を知る愉しみ、健康問題に関する自己学習、憩いの空間、という3つの機能は、養育院・渋沢記念コーナー・老年学情報センター・養育院中央記念広場で構成されています。

● 利用時間

入院している患者様とご家族の方 全日 7:00~21:00

通院している方 その他一般の方 平日のみ 9:00~18:00

● 持ち込み飲食可

● 患者様とご家族には図書の貸出可

- ・ 医学や介護の一般的な解説書を置いています。
- ・ 図書の内容が患者様の症状と一致しない場合もあります。
- ・ 患者様、ご家族と担当医師が、より良い話し合いをすすめていただくための参考としてご利用ください。

こころとからだの情報

なるほど！からだラウンジ

養育院・渋沢記念コーナーの中のサブコーナー「なるほど！からだラウンジ」は、患者様とご家族の方の自己学習を援助する場として、次のような情報提供を行っています。老年学情報センターの司書が企画運営しています。

- 疾患や治療法についての理解を深める情報を提供
患者様やご家族の方には図書貸出（ボランティア）
- 生活情報として役立つ**老年学**の知見を解説
- 病院部門および研究部門各所が作成した一般向けの業務案内・イベント情報・健康管理に関する情報を提供
- 読書の楽しみとしての図書（小説等）も提供
- インターネット接続パソコンに「インターネット版養育院・渋沢記念コーナー」をつくり、主に公的機関が発信している保健・医療・福祉関連サイトを紹介（リンク集）
- からだのしくみや疾患の状態の理解に役立つ立体モデル等の展示



●なるほど！からだラウンジで提供する10の情報



【病気になる前に】

- ①病気の予防についての知識を。
- ②病気の兆候に気づき、早期発見に役立つ知識を。

【発病後】

- ③日常的な自己管理に関する知識を。
- ④病気をもちながらの今後の人生について、生き方・価値観・心のもち方を新たにするために参考になる知識を。

【ご本人も、ご家族も】

- ⑤患者様本人も、患者さまとともに生活する人も、病気や治療法の正しい知識を。
- ⑥患者様を支える人の生き方・考え方の参考になる知識を。

【健康情報・健康商品の氾濫】

- ⑦マスコミや口コミで見聞きする情報の信頼性を見極めに役立つ知識を。

【医師とのコミュニケーション（患者学）】

- ⑧医師とのやりとりで、要領よく患者様や家族の方が必要なことを伝えたり、医師に大事な点を聞いたりするのに役立つ知識を。

【介護予防】

- ⑨サルコペニアやフレイルの知識を。健康に作用する社会の影響（社会疫学）の知識を。

【介護の知識】

- ⑩家族の方に、介護の制度、技法、考え方に関する知識を。

センターからのお知らせ

老年学公開講座の開催、治験のご案内、がん相談支援センターのご案内など、センターからのお知らせを展示しています。

センター職員の著作を展示

当センターの職員が一般向けに執筆した図書を展示しています。

センター2階の売店で購入もできます。一部、在庫がない場合もありますが、その際はもよりの書店でご注文ください。

インターネットで資料を公開

このパンフレットと、養育院史紹介リーフレット櫻園通信（おうえんつうしん）は、東京都健康長寿医療センターのホームページでも公開しています。

<https://www.tmghig.jp/hospital/about/history/index.html?id=kankou>



【歴史】養育院開設から、

現在の東京都健康長寿医療センターへ

- ・安達憲忠：東京市養育院の沿革及実況現況(1896)
- ・渋沢栄一：回顧50年(1922)
- ・養育院：養育院60年史(1933)／養育院70年史(1943)／養育院80年史(1953)／養育院100年史(1974)／養育院120年史(1995)
- ・養育院月報復刻版 全30巻(不二出版2009)，続編全12巻(2017)
- ・東京都老人医療センター：東京都老人医療センター36年の軌跡(2009)
- ・大久保一翁著/勝海舟編：櫻園集(1892)
- ・東京都総務局：東京市史稿 救済編第4(1975)
- ・江戸旧事采訪会：雑誌「江戸」2巻3号，7号(1915)
- ・松岡英夫『大久保一翁 最後の幕臣』中公新書、1979年。
- ・古川愛哲『勝海舟を動かした男大久保一翁 徳川幕府最大の頭脳』グラフ社、2008年
- ・東京都総務局：七分積金始末(東京都史紀要第8)(1951)
- ・渋沢青淵記念財団竜門社：渋沢栄一伝記資料(1955-1971)

- ・光田健輔：黎明期に於ける東京都社会事業(1956)
- ・内藤二郎：社会福祉の先駆者 安達憲忠(1993)
- ・大谷まこと：渋沢栄一の福祉思想ミネルバ書房 2011
- ・稲松孝思：目付海防掛(蕃書調書総裁)大久保忠寛の「病幼院創立意見」安政4年(1857)について：日本医史学雑誌第57巻第2号(2011)199頁
- ・稲松孝思，松下正明：大久保忠寛の「病幼院創立意見」(安政4年)と東京府病院(明治6～14年)について。日本医史学雑誌 第58巻第2号(2012)24p

【健康問題の自己学習】

患者様とご家族の方の学習

- ・北澤京子：患者のための医療情報収集ガイド(2009)
- ・中山建夫：健康・医療の情報を読み解く 健康情報学への招待 第2版(2014)
- ・柳田邦男：元気が出る患者学(2003)
- ・戸ヶ里 泰典，中山 和弘：市民のための健康情報学入門(2013)
- ・福田 洋ほか：ヘルスリテラシー 健康教育の新しいキーワード(2016)



山口晃(2013年)
「養育院幾星霜之図」
1階ホール

年表

養育院から東京都健康長寿医療センターにいたる医療面を主に記載しました。

病院名は、養育院附属病院（1972）、東京都老人医療センター（1986）、東京都健康長寿医療センター(2009)と変わりましたが、英名は一貫して TOKYO METROPOLITAN GERIATRIC HOSPITALです。

渋沢栄一は明治7年宮緞会議所の養育院・ガス局の事務取扱として養育院に関わり、明治9年養育院事務長となり、昭和6年の逝去まで、58年間養育院に関わり続けました。

一部に不適切な表現がありますが歴史的事実を損なわないように原文を尊重してそのまま掲載しています。



宮緞 会議所	本郷	1722	享保7	小石川養生所開設（幕末には機能せず、明治元年廃止）	
		1790	寛政2	老中・松平定信：町会所・七分積金制度開始、窮民救済	
		1857	安政4	目付・蝋書調所総裁・大久保忠寛（一翁）、幼院・病院創立意見	
		1868	明治1	4	江戸開城。七分積金は明治政府に移管、若年寄・大久保一翁
				12	大久保一翁（駿府徳川家中老）・渋沢栄一（パリ帰国報告）の出会い
		1869	2	8	教育所（三田、高輪、四谷見附）で七分積金による救護
				5	大久保一翁・第5代東京府知事となる
		1872	5	8	町会所・七分積金⇒宮緞会議所・共有金に（井上馨の内諭）資金を橋梁、ガス灯建設などの都市基盤整備に使用
				9	窮民救済策諮問⇒救貧三策を答申。養育院設置提案
		東京府	上野 神田	1873	6
2	上野・護国院（現・東京芸大）に養育院恒久施設開設 大久保一翁知事視察。養育院掟書 医師（村上正名）を囑託し、入所者に医療業務開始				
1874	7			5	愛宕下病院開院（→府下病院→東京府病院と改称）
				11	渋沢が東京会議所共有金取締に囑託、養育院事務を管理
1875	8			1	養育院は東京府病院の付属となり、医長・栗田崙派遣。養育院の重症患者は病院へ。養育院収容者の一部は病院の看護人に
				2	東京医学校の長与専齋から臨床講義依頼
1876	9			1	渋沢栄一が東京会議所会頭に推選される
				5	養育院は東京府直轄経営となる
1877	10			6	府下生活困窮者の無料診療、施業開始
1879	12			7	東京大学医学部派遣の医員引き揚げ
		10	神田和泉町に本院移転（現・三井記念病院の隣） 東京府癲癲狂院に患者移す ⇒巣鴨病院、松沢病院に発展		
1880	13	府会などで、沼間守一、田口卯吉：貧民への税支出停止を求める			
1881	14	7	東京府病院廃院、養育院単独で運営		

委任経営	本所	1885	明治18	4	税支出停止。養育院委員会による委任経営 (蓄積財産、東京府病院蓄積金、慈善会、下賜金、寄付金で運営)		
				12	養育院委員会(渋沢栄一、橋本綱常、伊達宗城、松平教敬など) 本所長岡町(現・石原4丁目)に本院移転		
		1888		21	種痘実施、22人善感		
		1889		22	11 出獄罹病者診療のため収容開始 12 東京市営時代となる。渋沢栄一養育院長、安達憲忠養育院へ		
		1890		23	6 院内診療を東京大学医学部に委任 看護婦養成開始、6カ月		
		1891		24	3 幼童世話掛長として、瓜生岩子を招聘		
		大塚	大塚	1896		29	3 大塚辻町に本院移転(現・大塚病院、監察医務院、大塚公園) 12 看護婦、看護人の教育開始
				1897		30	4 入澤達吉医長在籍、～35年、結核対策。後に“老人病学”出版
				1901		34	ハンセン病患者専用の「回春病室」設置(光田健輔)
				1902		35	結核多し 房州勝山転地療法開始 明治42年に安房分院に移る 9 看護婦規則を改正、修業年限2カ年となる 本院に感化部事業開始
				1906		39	10 結核患者病室設置 本院感化部を発展させ、井の頭学校開校
				東京市養育院	東京市養育院	1908	
						42	4 巢鴨分院新設 5 安房分院落成
1914	大正3					10	肺結核患者隔離治療のため板橋分院を開設、船形に磨崖碑建設
1923						12	9 板橋に本院を移転(関東大震災で大塚施設壊滅)
1925						14	11 渋沢栄一銅像竣工(板橋)
1930	昭和5					10	本院医療施設、病院として開設許可
板橋	板橋			1931		6	11 渋沢栄一養育院長逝去
		1933		8	2 老人患者の病後静養室を設置		
		1934		9	1 本院医療施設を病院として認可 患者収容定員717		
		1936		11	4 外来診療所を開所。地元住民の診療も行う 5 本院医療施設、定員731名で認可		
		1937		12	7 内科、外科、眼科、精神科、耳鼻咽喉科、小児科を置く		
		1940		15	6 看護婦長及び看護婦勤務規定制定		
		1941		16	10 医療保護法による医療保護施設として府知事より認可		
		1944		19	8 塩原温泉へ一部戦時疎開(栃木分院、昭和27年まで) 4 看護婦養成所修業年限を臨時措置により1カ年に短縮		

1944	昭和19	5	発疹チブス流行のため臨時都立伝染病院に指定。職員6名殉死 碧素（国産ペニシリン）本邦で始めて治療に使用
		12	看護婦養成所生徒の修業年限を3カ月短縮
1945	20	4	米空軍B29の上空襲。施設焼失し利用者107名戦災死
		9	元陸軍造兵廠工員宿舎を借り、練馬分院として再発足
1947	22	7	医務課を廃止、付属病院開設
1948	23		養育院は児童施設を民生局に移管（石神井学園、安房臨海学園）
		3	付属病院レントゲン室、手術室、新築竣工
			養育院用地の板橋区の都市計画と養育院現地復興計画の衝突
1949	24	3	養育院付属看護学院設置。昭和天皇ご夫妻行幸
		24	4
		4	連合軍軍政部(GHQ)キャロー女史の養育院板橋復興の記者会見 用地の一部を学校、区民施設、公園とすることで"養育院"復興
1951	26		光田健輔医師、文化勲章受章（ハンセン病対策）
1952	27	7	付属病院解剖室竣工
1958	33	3	付属病院新築工事竣工（470床）
		9	准看護学院竣工
1969	44	1	美濃部亮吉都知事、1000床の老人専門病院建設表明
1971	46	4	板橋高等看護学院第1回入学式
1972	47	3	養育院付属准看護学院閉校
		4	新付属病院・研究所開設（一般都民のための老人施設） 村上元孝養育院附属病院長・大田邦夫老人総合研究所長 この後、全国から新スタッフ集合
		10	養育院100周年。皇太子（現 上皇）ご夫妻行啓 昭和56年まで順次病棟開棟（最大750床） 日本老年学会開催（会長、村上元孝病院長） 病院内に臨床医のための病院研究室オープン
1973	48	9	第1回老年学公開講座がはじまる。市民に対する働きかけ
1976	51	9	板橋ナーシングホーム開設
1978	53	1	C T（コンピューター断層撮影）開始
		8	第11回国際老年学会（会長、村上元孝病院長） 第2付属病院（現多摩北部医療センター）第1回建設委員会開催 研究検査科、放射線科当直体制開始
1979	54	4	第2付属病院基本構想答申
		5	精神科病棟開棟（ナーシングホーム2階）
1981	56	4	老人総合研究所所長、今堀和友就任
		10	東京都老人総合研究所は財団法人に改組
1982	57	4	第2付属病院基本設計
		11	養育院附属病院10周年記念行事（記念誌、58.3刊行）

1983	昭和58	1	病院内研究室を拡充
		3	外来・全面禁煙開始
1984	59	1	「老年学情報センター」開設
		3	村上元孝病院長退任（同日付、名誉院長）
		4	豊倉康夫病院長就任
		9	米国国立研究所（N I A）と研究協力協定締結
1985	60	12	医事事務の電算化 血液科病棟にクリーンルーム（2床）開設
1986	61	4	『養育院附属病院』の名称を「老人医療センター」と改称 老人総合研究所所長、積田亨 就任
			「多摩老人医療センター」（第2附属病院）開設
		5	連続剖検5000例達成（1960年12月より）
		6	老人総合研究所はWHO研究協力機関としての指定
		11	伊豆大島三原山噴火被災者受け入れ。救護団派遣
1987	62	4	厚生省臨床研修指定病院となる
			豊倉康夫病院長「紫綬褒章」平成5年に「勲三等旭日中授章」
			この年、多くの診療科で予約制を導入（昭和61年より試行）
1988	昭和63	3	M R（核磁気共鳴画像検査）開始 中華人民共和国老年医療研究中心と研究交流事業協定
		9	ソヴィエト連邦医学アカデミー老年学研究所と研究協力覚書
			日本老年医学会認定医制度発足。当院から多数認定。
1989	平成元	1	村上元孝名誉院長逝去
		7	養育院事業推進検討委「養育院のあり方」を報告 宇野宗佑首相板橋キャンパスを視察
1990	2	3	豊倉康夫病院長退任、名誉院長となる。翌日蔵本築院長就任
		7	精神科病棟内に痴呆病床（10床）開床 外来処方、診療予約のコンピュータ導入
		8	老化モデル動物施設の開設 看護部制度に変更
		9	老人研にポジトロンCT施設（P E T）完成。附属診療所開設
1991	3	4	第1期病棟改修工事開始、以後順次行い平成8年竣工
		9	第8回アジア太平洋神経学会（会長、豊倉名誉院長）
		12	週40時間勤務試行 翌年7月本格実施
1992	4	4	老人総合研究所所長、木幡陽 就任
		6	救急救命士の病院実施研修を受け入れ
		7	新病院20周年記念講演会（都民ホールにて）記念誌発行
1993	5	4	小澤利男病院長就任
		10	中国北京市に老年病医療研究交流団を派遣

1993	平成5	11	豊倉康夫名誉院長
		12	初めて「養育院QOL発表会」開催 腹腔鏡下胆嚢手術、内視鏡下胃瘻手術盛んに
1994	6	5	第36回の日本老年医学会総会・蔵本築会長
		6	第1回養育院老年学会開催（小沢利男）、平成17年まで毎年開催
		7	総合診療（CGA）病棟開設
1995	7	3	養育院老人医療センター運営基本方針策定 阪神・淡路震災救援団派遣
1996	8	3	老人医療センター改修工事竣工
		4	ICU・CCU拡大
1997	9	4	蔵本築名誉院長。折茂肇院長就任
		7	高齢者施策推進室の発足（以後、養育院に関する組織改正繰返す）
		9	脳卒中診療ユニットの開設
		12	エイズ診療拠点病院の指定を受ける
1998	10	12	板橋区、板橋区医師会との地域連携3事業開始
			高齢者施策推進室管理部門は新宿の都庁舎に移る
1999	11	11	インフルエンザワクチン戦略展開。2001年に定期接種になる もの忘れ外来、ペインクリニックの開設 ブレインバンクの開設
		7	区西北部医師会などと医療連携に関する協定締結
2000	12	10	国際高齢者年記念講演会開催
		1	区西北部二次保健医療圏等医療連携協議会の開催
		4	老人医療センター「ホームページ」を開設
		4	老人総合研究所所長、鈴木紘一 就任 三宅島噴火救援団派遣、全島避難一部受け入れ
		10	地域連携室の開設
2001	13	11	養育院条例廃止：組織図上【養育院】の名前が消える
		1	高血圧外来、不整脈外来、めまい外来の開設 心臓ペースメーカー植込み1000例達成 各科でクリニカルパス入院盛んになる
		4	高齢者施策推進室は福祉局に統合となる
2002	14	12	老人医療センター院内LAN稼働
		4	(財)東京都研究福祉振興財団・老人総合研究所に改組
		9	老人医療センター30周年記念式典開催、記念誌発行
2003	15	10	林泰史病院長就任。研究所所長兼任
		7	オーダーメイド医療実現化プロジェクト参画
2004	16	4	新・初期研修医制度開始（マッチング方式）
		5	病院機能評価受審。8月に認定
		8	「福祉局」と「健康局」が統合され「福祉保健局」となる 冠動脈造影装置導入。冠動脈インターベンション盛んに

2004	平成16	専任リスクマネージャー配置
2005	17	感染管理ナース専従となり、感染管理チーム活性化 包括的呼吸リハビリ・クリニカルパス開始
2006	18	1 東京都老年学会と東京都保健医療学会が統合 4 井藤英喜病院長就任。研究所所長兼任 7 東京都が「行財政改革実行プログラム」を公表 育寿会（糖尿病患者会）30周年記念行事
2007	19	5 福祉保健局「板橋キャンパス再編整備基本構想」公表 N S T（栄養サポートチーム）活動開始
2008	20	1 老研・遠藤玉夫：朝日賞受賞「福山型筋ジストロフィーの発見とその類縁疾患における病態の解明」 11 レセプトオンライン請求開始（10月診療分） 連続剖検9000例達成（1960年12月より） 昭和47年以來の医局の、翌3月に養育院付属病院同窓会 第100回記念 老年学公開講座開催
2009	21	3 心臓外科開設 4 老人医療センターと老人総合研究所を一体化し、地方独立行政法人 東京都健康長寿医療センターとなる。松下正明理事長、井藤英喜 センター長就任 バイオリソースセンター設立 DPC（診断群分類包括評価）実施病院に指定 11 「さい帯血移植医療機関診療科」として登録される
2010	22	新センター建設基本設計 2 「東アジアの高齢化・高齢社会」第1回ワークショップ開催
2011	23	3 東日本大震災 救援活動
2013	25	4 板橋区地域感染症対策合同カンファレンス開始 （医師会、日大、帝京大、豊島病院の連携） 5 新施設内覧会 医局同窓会（池袋メトロポリタン ホテル） 新施設開院。電子カルテ運用開始 6 養育院・渋沢記念コーナー開設
2014	26	養育院の医療140周年記念講演会（稲松、井藤） 渋沢銅像 板橋区登録文化財認定
2015	27	3 松下正明理事長退任（11月に退任記念講演会） 4 井藤英喜・理事長就任 許俊鋭・センター長就任 6 第29回日本老年学会開催、総会長：井藤英喜（センター理事長）、 基礎老化学会：遠藤玉夫（副所長）、老年社会学会会長：高橋龍 太郎（副所長）
2017	29	3 遠藤玉夫老研副所長：学士院賞受賞 9 養育院剖検1万体制記念会 昭和30（1960）年～平成29（2017）年
2019	令和元	4 令和に改元 5 渋沢栄一：2024年度から1万円札肖像に決定 6 鳥羽研二：理事長就任 日本基礎老化学会大会長：石神昭人研究部長。日本老年精神医学会 大会長：栗田圭一研究部長



このパンフレットは、
ホームページでも公開しています。



本パンフレットは、明治5年(1872年)に創設された『養育院』から、今日の『東京都健康長寿医療センター』に至る150年近い福祉・医療史の道筋、敷地内にある養育院本院碑、渋沢栄一銅像などについて、わかりやすく説明したものです。先人たちの、他人への思いやり、公益に対する志を考えるきっかけとしていただければ幸いです。

- 一部に不適切な表現がありますが歴史的事実を損なわないように原文を尊重してそのまま掲載しています。

発行	東京都健康長寿医療センター	2019(令和元)年	8月
監修	松下正明(元理事長)	井藤英喜(名誉理事長)	
	鳥羽研二(理事長)	許俊鋭(センター長)	
制作	稲松孝思(顧問医)	宮本孝一(老年学情報センター)	